

# 里山のポリティクス： エコロジカル・ナショナリズム研究序説

藤 田 渡

Politics of SATOYAMA: An Introductory Analysis of Ecological Nationalism

FUJITA Wataru

**Abstract:** SATOYAMA, is the Japanese name given to a landscape and ecosystem formed through an interaction between man and nature in maintaining a rural farming lifestyle, has been increasingly recognized as an important secondary natural environment. This essay aimed to clarify the unique political and cultural characteristics associated with ecological nationalism in the contexts of the debate about the use of SATOYAMA in conservation efforts and the objectives of, and rationale underlying, conservation. Debate about SATOYAMA often involves a kind of nationalism in that nostalgia for homelands and “lost” traditional rural landscapes, which have long been foci of nationalism, are frequently mentioned. Such concrete conceptualizations of diverse homelands are juxtaposed with the more abstract symbolism that privileges notions of a more homogenous “Japanese homeland”. On the one hand, the nationalism associated with SATOYAMA is based on the aforementioned nostalgia for homelands. On the other hand, however, such nationalism also differs from traditional construals in that it also privileges ecological issues. Indeed, the representations of SATOYAMA in both official documents and photographs emphasize its ecological importance, aesthetic value, and peaceful and pastoral lyricism. Thus, we must carefully consider how to honor both the local roots underpinning, and the conservation considerations highlighted by, the ecological nationalism involved in current conceptions of SATOYAMA.

**Key Words:** SATOYAMA, ecology, nationalism, political ecology

## 1. 何が問題なのか

里山という言葉にネガティブなイメージを持つ人は少ないだろう。和やかで牧歌的な農村風景、人々の素朴な温もり、自然の豊かさ、といった里山のイメージは、メディアを通じて盛んに語られ、広く社会に浸透してきた。国の環境保護や農業に関する政策でも、二次的自然の重要性や農林業の多面的機能が強調されるようになってきている。それらの政策をめぐる大きな政治的対立も見られない。学術的には、現在の里山保全につながる議論は、1980年より様々な角度から積み上げられてきたが、里山保全の必要性そのものを疑問視するような議論は管見の限りない。

里山をめぐるのは、生物多様性保全や希少種の保護といった、いわゆる自然保護の観点からの重要性だけでなく、日本人の原風景としての里山、自然と共生してきた日本人の伝統、といった文化的な側面がしばしば強調される。自然をめぐるそうしたナショナリズムの展開については、森岡〔1994: 2章〕が、「エコ・ナショナリズム」として、その背後にある（メタ＝テキストとしての）民族的差別性を批判している。確かに、「エコ・ナショナリズム」に限らずナショナリズムには森岡のいうような排他性もある。一方で、多数の人々を一つにまとめ国家統

合の土台にもなる。その代替となる概念や仕組みがないままナショナリズムを否定することは困難である。それよりも、個別のナショナリズム（ここでは、里山の）が、論理的構造や権力性の面でどのような特徴を持っているのかを明らかにし、もし弊害があるのなら、解決の糸口を模索することが重要ではないだろうか。

里山をめぐるナショナリズムは、後に論じるように、「ふるさと」へのノスタルジーと生態学的な知識が接合するかたちをとっているのが特徴的である。こうした叙情的な愛国心・愛郷心と生態学とが接合したナショナリズムを「エコロジカル・ナショナリズム」と呼ぶことにする。森岡の「エコ・ナショナリズム」が、漠然と環境にやさしいという意味で「エコ」と冠するのに対し、より生態学的な含意を持たせるためである。本稿では、里山をめぐるエコロジカル・ナショナリズムが論理的にどう成立・展開するのかを考えてみたい。以下、まず、里山保全をめぐるこれまでの議論を整理する。その上で、行政文書やメディアなどで、里山のナショナリズムがどのように現出しているのか具体的に検討する。特に、時間的には里山に先行する「ふるさと」をめぐるナショナリズムとの比較から、「エコロジカル・ナショナリズム」の特徴を洗い出す。その上で、その権力性の問題について若干の考察を行う。

## 2. 里山保全論

### 2.1 里山とは何か

里山保全について議論は、前述のように、守山〔1988〕を端緒とし、石井・植田・重松〔1993〕、田端編著〔1997〕、重松〔1999〕など、2000年ごろまでは生態学や造園学を中心に進み、その後、民俗学、社会学、環境史なども含んだ学際的な研究へと発展してきた。しかし、里山とは何か、それはどのような履歴を有する、どのような状態の森林（またはそれ以外の自然）なのか、必ずしも明確に整理されてきたわけではなかった。

里山という語がいつから使われていたのか。現在につながるような意味では、四手井綱英が「農用林」の意味で用いたのが最初のようなようだ〔武内・鷺谷・恒川編 2001: 1; 有岡 2004: I 卷 1-2〕。しかし、語源だけでなく、里山という語がどういう土地を示すのか、その範囲の区切り方も論者によって様ではない。

最もシンプルな用い方は、地理的に集落に近くアクセスしやすい森林を、より遠くの奥山と対になる概念として里山と呼ぶものである<sup>1)</sup>。農山村に暮らす人々は、集落に近い森で薪炭材、落葉や刈敷のような肥料の材料といった日常生活や農業に必要な資源を採取してきた。四手井が里山という語をおもに農用林を指し示すものとして用いたのは、まさにこういった点を捉えたものだ。しかし、地理的に集落に近い森林では用材のためにスギやヒノキなど針葉樹が植林されもした。また、山村の場合は、焼畑に用いられることもあった。

最近では、里山という語を、こうした集落に近い森林のうち針葉樹の植林地を除いたものに限定して用いることが多い<sup>2)</sup>。人為攪乱を受け続けて維持・形成されてきた二次的自然、原生自然とは異なる独自の生態系という意味で里山を捉えると、モノクロープであるスギ・ヒノキ植林地は異質だからである。この狭義の里山の典型的なイメージは広葉樹の雑木林である。現在、ボランティアなどによる保全活動が行われているのは、おもにこの雑木林である（針葉樹の植林地での枝打ちや間伐のボランティアは、森林ボランティアと呼ばれ、里山保全活動とは区別されることが多い）。また、こうした、農業や生活のための資源採取のなかで維持されてきたことを重視する趣から、森林だけでなく水田などの農耕地や集落周辺の自然環境も含めた全体を一つの系と捉えるべきだ、と考え、それらを統合的に里山、あるいは、里地里山と呼ぶことも増えている<sup>3)</sup>。以下、本稿では、里山という時には森林を指し、より広く農耕地も含めた農業生態系全体については里地里山と呼ぶこととする。

ところで、里山保全において中心となる広葉樹の雑木林が、昔から変わらずにそうした状態だったわけではない。例えば、西日本ではアカマツ林が多かった。東日本よりも西日本での方が、塩、鉄など様々な商品生産が盛んで、燃料材として過剰に利用されてきたのである。アカマツ林は燃料材のほか、マツタケを採る場でもあっ

1) 有岡〔2004〕は、基本的には、こちらの定義を用いているが、スギ・ヒノキ植林地を異質なものととして扱う箇所もある〔有岡 2004: II 卷 241〕。

2) 武内・鷺谷・恒川編〔2001〕、龍谷大学を中心にしたプロジェクトの一連の成果〔丸山・宮浦編 2007; 2009; 村澤・牛尾・宮浦編 2015〕はこれに当てはまる。また、日本における里山保全のパイオニアである大阪自然環境保全協会が里山保全を始めた1980年代当初、薪炭林と、薪炭林とはいえないような雑木林を含めて「里山」と標記していた〔岡 2016〕。

3) 田端編著〔1997〕がこれを提唱し、いわゆる森林（農用林）は、「里山林」と呼んだ。

た。また、白砂青松というように日本の典型的な風景とも考えられていた。しかし、1960年代以降、アカマツ林はマツクイムシによる被害によって姿を消していった〔有岡 2004〕。その後、スギ・ヒノキの植林が行われたところもあり、また、放置されて広葉樹の雑木林に遷移したところもある〔有岡 2004：Ⅱ巻 187；武内・鷺谷・恒川編 2001：60-61；横田 2009：261；佐久間・伊東 2011：103-104〕。

長らく広葉樹の雑木林だったところでも、必ずしも、古くからの人間の資源採取との均衡によって維持されてきたわけではなく、時代によっては、過剰な資源利用によって荒廃し、資源の枯渇や洪水を引き起こすこともあった〔有岡 2004；宮浦 2007：57-58〕。また、古くからの炭の生産地で品質改良を行うためクスギの植林を行う〔佐久間 2014：7-9〕、かつては刈敷・飼料を採取する草地だったが、需要がなくなったため広葉樹を植林し薪炭林にする〔古川 2004：248-250〕、ということも行われてきた。農耕地も含めた里地里山に生息する生物のなかには、朝鮮半島や中国大陸の農業生態系に共通する種も少なくない。いわゆる照葉樹林文化として、稲作以前の生業・文化複合の一部として人為的に持ち込まれた可能性を主張する論もある〔養父 2009〕。

つまり、広葉樹の雑木林が典型的な里山としていつの時代も日本全国にあったわけではない。その土地ごとに、また時代ごとに、自然条件や社会経済的状况に応じて人々が周囲の森林を使ってきた。必要な資源を採取するだけでなく、植林なども行って積極的に生態系を使いやすいように変えてきた。そうした移り変わり、人々の作為と自然の反作用の連鎖の末に現在の姿がある。そうした一連の流れとして里山を見るならば、スギ・ヒノキの植林地だけを除外するのも不自然である。まずは、人々が自然と交渉を重ねてきた里山の履歴そのもの、つまり、里山とは何なのかを俯瞰し、その上で、これから私たちが里山をどうしてゆくべきなのか展望するという整理が必要である<sup>4)</sup>。

## 2.2 里山保全論における主観の混在

これまで、里山保全に関する議論は、目の前で起きている現実、いま（当時）なくなりつつある環境、そこに適応し生息する生物を守るという実践論として展開し、上記のような里山の自然の履歴を踏まえて、いつの時代のどういう状況の自然環境、あるいは、生態系を望ましいものとして保全・再生すべきなのかについて体系的な議論はあまりされてこなかった。そのため、何を大切に考えるのかという判断基準が論者によって異なり、科学的データをもとにした議論のなかに主観的な価値判断が紛れ込むことになった。例えば、重松〔1999〕は、里山保全の目的を、生物多様性保全、環境保全機能（洪水防止など）、シイタケ栽培のほだ木のような生産機能、レクリエーションなど、多彩なものを挙げる〔前掲書：26-28〕。具体的な保全・管理の技術論については、保全・管理すべき林床の状態をタイプ別に分け、それぞれをレクリエーションの利用形態に対応するものとして説明する〔前掲書：39-42〕。つまり、守るべき里山像は、少し前の時代の姿としての雑木林が漠然と想定されるのだが、その論理的根拠は示されない。一方で、「季節感や生物環境の多様性の点で落葉広葉樹の雑木林は優れている」「（クスギ、コナラの純林の）整然とした林相は美しい」〔前掲書：33〕、「若いマツ林は景観的に単調なきらいがあるものの、成熟したアカマツ林は独特の風情を残し、親しみのある景観を形成していた」など、美しさを前面に押し出す。重松は石井・植田との共著書『里山の自然をまもる』〔石井・植田・重松 1993〕のなかでも同様の議論を展開する（4章・5章）。その一方で、石井（2章）と植田（3章）は明確に生物多様性保全という立場から里山保全が必要であることを生態学的データに基づき論じている。同書の後書きにも、3名の間の意見の相違をあえて統一させなかったと書かれている〔前掲書：173〕<sup>5)</sup>。ただし、石井も、1章のなかで、自身の幼少期に、田園と雑木林が入り組む横浜市郊外で自然を満喫したこと、夕焼けの空に浮かび上がる木々のシルエットという風景の美しさに胸を押しつぶされそうになったことを追憶する〔前掲書：10-11〕。さらに、そうした風景が日本人の原風景、自然観や文化の基盤であり、日本人の心身ともに健全な生活のために里山的な自然が必要だという〔前掲

4) 松村・香坂〔2010〕は、里山保全活動のなかで一般的に信じられている、人間と自然が持続的に関わり合いながら里山が維持・形成されてきたという歴史が実際には正しくないということは認めながら、歴史学的に見て正確かどうか、ではなく、社会学的見地から、実際に動いている里山保全について考察・評価すべきであると論じる。確かに、歴史的経緯の理解に誤謬があると批判ばかりをするのではなく、社会的に構築され機能している里山のイメージを考察すべきである。しかし、現時点で正しくないことが明らかな歴史に依拠して保全活動が立案・実施され、参加する人たちもそれを信じて自分たちの活動を意義づけているのだとしたら、それも看過できない。

5) 共著者の1人である石井は、筆者の質問に対し、造園学者のほうが美観などを重視する傾向があるとの見解を示した。

書：12-13]。

武内・鷺谷・恒川らの『里山の環境学』[武内・鷺谷・恒川編 2001]にも似たような立場のずれが見られる。同書では、自然のかたまりがつらなることで地域の景観の多様性をつくっており、それがかつては農業によって一体的に管理されてきたこと、今後も里地里山の一体的管理が必要なことを示す[前掲書 2001: 8-9]。里地里山の種の多様性の要因として、土地利用の違いに応じた二次的自然のパッチごとに異なる種がいるという多様性がある( $\alpha$ 多様性)、さらに、そうしたパッチがモザイク状に連なり、地域の二次的自然を形成している( $\beta$ 多様性)、地方が異なれば生物相が異なる( $\gamma$ 多様性)、と説明する[前掲書 2001: 16-17]。また、里山がどのくらい生物多様性に富んでいるか、生態学的な実証研究の成果を示す[前掲書：3章]。しかし、その一方で、別の章では、主観的価値からの議論が見られる。例として、京都盆地の周辺の里山では、かつてアカマツのなかにツツジが混じっていたのが、柴刈りの利用圧がなくなったことや、松枯れによって照葉樹林化、ヒノキ林化が進み、景観の変化を招いたことを示す。ツツジはなくなったのではなく、照葉樹林の下に隠れているので、照葉樹の除伐によって景観を回復することができると論じる[前掲書 2001: 60-68]。

興味深いことに、より後年、武内[2013: 81-85]は、里山の歴史的変遷を踏まえて、自然と人間のバランスが保たれていたのは明治の終わり頃から戦後、燃料革命が始まるまでのわずか半世紀ほどで、この時期の環境を守るべきだと言明している。この時、すでに、自身がリーダーシップをとった「日本の里山・里海評価」[国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会編 2010]によって、現に失われつつある里山の価値が多面的に、基本的には主観を取り除いた態度によって評価され、この「明治の終わり頃から戦後の燃料革命までの半世紀」の姿を保全する価値がすでに裏付けられていた。

この「日本の里山・里海評価」では、学際的に多数の専門家により可能な限り客観的なデータに基づいた議論が展開されている。しかし、時系列的に考えれば、これまで見てきたような多様な価値判断を内包しながらともかく里山は保全すべきだろうという前提から出発したこともまた事実である。

具体的な実践に関わる議論のなかでは、より明瞭に目的と手段の転倒が見られる。典型的なのは、里山の資源を利用しようという主張である。『里山の環境学』[武内・鷺谷・恒川編 2001]でも、市民が里山を保全する目的として、里山が生産の場として機能していた時代の景観を現代にも残すことや、農業の技術を伝承すること、レクリエーション、などを里山保全の目的として挙げる[前掲書 2001: 23-24]。しかし、昔の生産様式をそのまま復活させることは現実には困難である。だから、例えば、都市住民がインストラクターのもとで、里山の材料で焼かれた炭による環境修復や生態保全・修復を体験する場として活用することを構想したり、バイオマス燃料として里山の資源の新たな利用可能性を模索したりする[前掲書 2001: 5章]。

保全活動として実践されているものもある。例えば、亀岡市では、里山（竹林）のタケ材から作った木炭を農耕地の表層土壌中に投入することで、長期間、炭素を貯留するという「カーボンマイナス・プロジェクト」を実施している。「気候にやさしい」農作物としてブランド化することで、里山保全と農業の再生を図ろうというのである[牛尾・鈴木編著 2012: 7章]。しかし、農作物の品質がよくなるわけではない。大きな排出削減が期待できるならば、排出権取引などにより自立したビジネスモデルが模索されるべきだが、そのような動きもない。里山を守るための方便なのである。『里山資本主義』[藻谷 2013]が紹介したような、里山由来のバイオマス資源を現代のテクノロジーと融合させて便利に使う、あるいは、その特徴を活かした使い方をするなど実質的に有益な「目的」が主となるような里山の活用事例は少ない。

非常に多面的な里山の価値が認められるのに呼応するように、里山保全活動、特に、都市住民を中心としたボランティアによる活動は多様な目標を掲げる。自然環境保護以外には、里山の資源利用よりも、レクリエーションと環境教育が眼を惹く。例えば、長年、市民参加による森づくりを実践してきた中川重年は、その経験をもとに、市民による里山や人工林（スギ・ヒノキ林）管理のための実践的テキストをつくった[中川 2004]。放置された里山が「ヤブ化」し荒廃することで生物多様性が減少することから、それを再生しようとする市民グループが各地に生まれた[前掲書：24]、と説明しており、生物多様性の保全を里山保全の主な目的と見なしていることがわかる。しかし、同時に、里山林の価値として生物多様性のほか、景観、（遷移を助けることで）天然林への誘導、レクリエーション・教育の場、バイオマス生産の場、という5つを挙げ、それごとに異なる整備目標を実践論として示している[前掲書：54-67]。これは、重松[1999]でも同様である。5つのうちどこに重きを置くか

で整備の仕方が変わってくるというのだ。「そうした市民参加の森づくりにおいて、レクリエーションや教育の場としての価値を里山に見だし、楽しむことを第一義とするのは必然的姿だ」という〔前掲書：26〕。そのための整備目標としては、レクリエーションの場になり得る広い空間作る、なるべく多様な自然を作るほうが面白い、などと述べる〔前掲書：70〕。

つまり、これらの多様な目的は、大まかには似たような活動（下草刈りや除伐など）によって達成されるのだが、細かく見ると、それぞれは両立しない。レクリエーションや教育にとって使い勝手がよいことを最重視すれば、生物多様性の面では何かが犠牲になる可能性がありうるということである。そのあたりのバランスをどう考えるのか、誰がどうやって決めるべきなのかを明確に論じたものは管見の限りない。

### 3. 「ふるさと」のノスタルジーと里山

#### 3.1 「ふるさと」のノスタルジーをめぐるナショナリズム

里山のエコロジカル・ナショナリズムが具体的にどう発現し、どのような特徴を持っているのかを検討する前に、「ふるさと」のノスタルジーをめぐるナショナリズムの論理的展開を整理しておきたい。後述のように、里山は日本人の原風景として称揚されてきた。それはどのような場所なのか、一言でいえば「ふるさと」である。実際には、里山もふるさとも多様である。しかし、水田があり、山があり、川があり、穏やかな人々の暮らしがある、という「ふるさと」のイメージが、ノスタルジーとして日本人としてのアイデンティティに転化したことについては、すでに多くの研究がある〔Ivy 1995; Robertson 1988; 1991; 1995; 岩本 2007; 石井 2007 など〕<sup>6)</sup>。一人一人にとってのふるさとは、具体的な経験として固有のものとしてある。それが画一的なイメージに変換され人々の心を突き動かすナショナリズムに転化する論理的思考過程は、里山にも部分的に当てはまる。

まず『カルティニの風景』〔土屋 1991〕を見てみよう。日本ではなく、おもに 19 世末から 20 世紀初頭のインドネシアを論じたものだが、風景がナショナリズムになる論理的思考モデルとして、管見の限り、最も明瞭である。インドネシアのナショナリズムの思想的パイオニアの一人とされるカルティニは、当時のジャワの貴族の風習に従い若くして蟄居し、結婚後、産褥のため世を去った。土屋は、自らが見たありふれたジャワ農村の風景画と、カルティニの書簡集の記述とを重ね合わせながら、ナショナリズムとしての風景の成立過程を解き明かす。そこで示されている思考過程のモデルは次の通りである。現在、インドネシアでは、水田、椰子の樹、火山など「うるわしの熱帯」を描いた風景画が画廊だけでなく露店などでも広く売られている。こうした風景画は、カルティニが生きた時代に生まれた。この時、オランダによる植民地支配が安定し、オランダ語での出版・教育も普及しつつあった。そうした時代精神を背景に、オランダ人向けにジャワの平穏な風景画が描かれるようになった。それが、カルティニのようなオランダ語教育を受けた現地貴族層に受容され、やがては「インドネシアの風景」として浸透していった。外国人、あるいは、近代の視点から、風景を対象として距離を置いて眺め、現実世界から切り取り描く。そこでは風景は現実世界の有象無象を捨象し静態化・抽象化・様式化される。「誰のもとへも帰属しないがゆえに誰もが共有しうる」〔前掲書 142〕。そういうメスティーン的風景が、「これはジャワだ」ということによって、ジャワ人の「民族の歴史」と結びつけられ「インドネシアの風景」となる。

近代により外在化され、抽象化され、それが再び具体的な場所を見る視点として帰ってくる。それは、日本において「ふるさと」へのノスタルジーがナショナリズムの容れ物となる契機でもあった。人々は、そうした抽象化された「ふるさと」イメージを受容し、それを通して風景を見るようになる。そこで大きな役割を果たしたのはマスメディアや観光だった。荒山〔2003〕は、1927 年に新聞社を中心に行われた「日本新八景」の選定過程で、各地元が大規模な動員を行ったことに、風景のナショナリズムを自明とした上で風景のローカリズムを喚起する構図を見いだす。この「新日本八景」は、観光振興の一環でもあった。

戦後、高度経済成長により、格段に多くの人々が農村から都市に移住し、近代的消費生活を送るようになった。津々浦々にテレビが普及するようになった。観光旅行も一般的になった。「新日本紀行」のように、各地の「ふるさと」の暮らしや祭りを紹介する番組が放映されると、都市で生まれ育った人だけでなく、農村出身者も、自分

6) そうした「ふるさと」をめぐる文化の政治についての議論で、しばしば、その権力作用についての具体的な説明が不十分であることは石井〔2007〕が指摘する通りである。

の「ふるさと」とほかの地域の「ふるさと」を並列に（つまり、同じ日本の「ふるさと」の一類型として）捉えるようになる。つまり、自分の「ふるさと」を距離を置いて見る視点を身につけるようになる〔坪井 1968〕。「ふるさと」から切り離され浮遊する。観光という行為も、これと同じように、どこにも帰属しない人々を作り出す〔Robertson 1998: 119〕。そういう心性が、抽象化された「ふるさと」イメージを受容し、個別の「ふるさと」をあらためて日本の「ふるさと」として捉えなおすのである。

アイヴィ [Ivy 1995] は、さらに、日本での「ふるさと」へのノスタルジーの特徴として、資本主義的近代化が進むことで正統な日本の伝統が失われつつあり、守る、あるいは、取り戻す必要があるという論理が底流していることを挙げる。過去の現実そのものではなく、幻影、あるいは、消費可能な形に操作された「消えゆく本来の日本」のイメージが人々を動員する。そこでもやはり観光という装置が重要なモメンタムとなってきた。アイヴィは、1970年代の「ディスカバー・ジャパン」、それに続く1980年代の「エキゾチック・ジャパン」という、大きなインパクトのあった二つの観光キャンペーンの言説分析を行っている。前者では、森があつてお寺があつて、という、どこにでもあるある意味で抽象的な風景をバックに、若い女性が旅をするというシーンが用いられた。都市に暮らす人々が、日常から逃れて自らの原風景を求めて旅をする。それは、自分探しの旅である。後者では、インドなどオリエント起源の日本の古い文化に光が当てられ、「エキゾチックな日本」の魅力が強調された。同時に、それは、都市で生まれ育った世代にとって、もはや日本の田舎が「なつかしいふるさと」ではなく「異国」だということでもあった。しかし、それでも、「消えゆく本来の日本」への旅であることに変わりはない。

都市であろうと、田舎であろうと、メディアを介した社会空間に組み込まれる。メディアによって流布された「ふるさと」のイメージが、ノスタルジーを消費する人々のマインドを形づくる〔Robertson 1998: 118〕。人々は「ふるさと」を旅して歩く。ナショナリズムとしての「ふるさと」はそうした状況で浸透してゆく。

### 3.2 「ふるさと」のナショナリズムと政治

「ふるさと」、あるいはその風景は、上記のような論理で、個別具体のものからナショナリズムに転化する。ただし、前項で示した事例は、現実の生々しい政治的意図を含んだものではなかった。アイヴィが分析した国鉄によるキャンペーンは、観光振興による乗客増を意図したものだった。そのほかの事例も、マスメディアを通じた浸透だが、そこで何らかの政治的操作が意図されていたという証左はない。しかし、これ以外に、「ふるさと」のナショナリズムを政治的に利用する動きはあった。

「ふるさと」という言葉が前面に出てきたのは、竹下登元首相の「日本列島ふるさと論」（1984年）〔Robertson 1988: 504-505〕、さらにそれを発展させた「ふるさと創生事業」である。これは、多極分散化国家を目指した、いわゆる地方活性化のための政策である。全市町村に各1億円づつ、用途を自由にした補助金を交付したものが耳目を集めたが、付随して、自治省による各種施策も行われた〔佐々木 1990〕。この「ふるさと創生」の理念として、竹下は、首相就任後の所信表明演説で、次のように述べている。「「こころ」の豊かさを重視しながら、日本人が日本人としてしっかりと生活と活動の本拠を持つ世の中を築こうとの考えに基づく。」〔日本経済新聞 1987/11/27〕。これに先立ち、日本経済新聞に掲載された自民党総裁候補の経済政策の説明のなかでは、「地域、社会、国のそれぞれが自らの“ふるさと”と感じられる国作りを進める」と述べられている〔日本経済新聞 1987/10/10〕（この記事はデータベース上では著者が不明だが、竹下候補陣営の自民党議員であろうと推察される）。後年、1997年のインタビュー記事〔永野 1997〕のなかでは、竹下は、「おじいさん、おばあさんまで遡ると、原籍人口は今の3倍ぐらいになるんじゃないか。それを第二住民にしてふるさと便りのような広報を送る。そうすれば、都市と農村の対立、生産者と消費者の対立というのがなくなって和やかな日本になる、それがふるさと創生の哲学の中にある」と語っている。個別具体の「ふるさと」と、抽象化されナショナリズムの容れ物となった「ふるさと」が渾然としているのである。

どちらかと言えば「ハト派」だった竹下が、「ふるさと創生」によって、例えば、愛国主義的な思潮を喚起しようとしたとは考えにくい。むしろ、すでに存在していたナショナリズム的な「ふるさと」へのノスタルジーを政策フレームのなかにうまく取り込んだのであろう。ただし、地域振興策のため、「ふるさと」が強調されるようになったことは重要である。ロバートソンが例に挙げる国債購入を呼びかけるポスターの「いいなあ。ふるさと日本」というキャッチコピー〔Robertson 1991: 34〕は、まさに、その端的な例である。このようななか、各地方で

「ふるさと作り」が官民共同で進められ、体験型観光施設である「ふるさと村」も作られた。それは、「日本のふるさと」イメージに合わせた創造だった [Robertson 1998]。

一方、こうした「ふるさと」イメージが、農村への経済的支援の正当化に使われているという指摘もある [岩本 2007]。WTO のウルグアイラウンドにより、農産物への直接的な保護政策がとれなくなったことや、都市住民からの農村過保護論がその背景にある。岩本が分析の中心に据えるのは 2001 年に始まった文化庁による「ふるさと文化再生事業」である。この事業は、各省庁の事業と連携した形で行われており、1999 年にウルグアイラウンドへの対応策として成立した「食料・農業・農村基本法」（新農業基本法）を契機としたものだった。「農村の多面的機能」に光が当てられ、農村の伝統文化を保存することが法律に盛り込まれ、個別地域を越えた国民共通の誇りとしての文化が強調された [前掲書：37-42]。岩本はさらに、その陰に、神道政治連盟を中心とする保守政治家の復古主義的運動を指摘する。「ふるさと」や里山のナショナリズムを、戦後政治の思想運動の潮流とどこまで関連づけることができるかは今後の大きな課題の一つだが、ここではこれ以上、踏み込まない。ただし、農村票に依存してきた自民党による農業・農村保護政策が、1980 年代以降、ナショナリズム的「ふるさと」イメージを巧みに取り込んだことの延長に、おそらくは、里山をめぐる諸政策もあることは想像に難くない。

### 3.3 行政文書に現れた里山ナショナリズム

里山保全の必要性を訴える議論には、当初より、情緒的、主観的な部分が含まれていたことは先に述べた。里山保全を訴える論者たちが自然を愛し、美しい里山を守りたいと思う、そのこと自体は、ごくあたりまえのひとりの人間の感情の発露である。しかし、「私が」ではなく、「日本人が」美しいと思う里山、であれば話は違う。書き手の意図とは別にナショナリズムとして何らかの政治性を持ちうる。前章で見たような学術的な論考にも、そうした記述は散見された。意外なことに、環境省の行政文書の中に前項の「ふるさと」の言説に通じるようなナショナリズム色の濃い記述が見られる。

2010 年（平成 22 年）に環境省自然環境局が策定した『里地里山保全活用行動計画』[環境省 2010 a] は、国の施策と、地方自治体、NPO、企業、市民グループなどの多様な主体の協働による「国民的運動」として里地里山保全をどのように進めていくべきか、具体的な指針を示す。「生物多様性国家戦略 2010」に立脚したもので、生物多様性保全を主要な目的として、保全活用の制度的側面を実施例を参照しながら検討するというのが実質的な内容である。全体的には、行政文書にありがちな手堅い記述となっているなか、その前文が目を惹く。縄文以降、3000 年に及ぶ人と自然の関わりの歴史を通じて資源が循環し持続的に自然の恵みを楽しむ空間が形成・維持されてきた、と、里地里山の歴史的継続性のなかで、ギフチョウやカタクリのようにそこに適応した生き物がいることを示す。それに続く一節である。

「故郷（ふるさと）」や「春の小川」などの唱歌にうたわれている身近な里地里山の風景は、日本人が共有する原風景であり、日本の精神文化の基盤にもなっています [環境省 2010 a]。

同じく 2010 年 10 月の生物多様性条約の第 10 回締約国会議（COP 10）に提出された「SATOYAMA イニシアチブ」について説明するリーフレット [環境省 2009] でも、その前段の部分で、同様の記述が見られる。

日本人は里地里山に深い情緒的愛着を抱いており、そのような景観は日本人のインスピレーション、想像、創造力を深く刺激してきました。里地里山というテーマは俳句、伝統芸能、手工芸品、さらには音楽でも出てきます。また昔話や現在のアニメ映画の舞台としてもよく取り上げられます [環境省 2009]。

このリーフレットでも、あとに続く記述は、生業生態系のなかに豊かな生物が見られること、開発と保全のバランスを保ち、そうした二次的自然を守ってゆくための地域コミュニティを含めた利害関係者による意志決定が重要であること、など、論理的で淡々としたものになっている。ただし、最後の部分では、自然の豊穡に対し、祭りや儀式でそれを願って祈り、また感謝の念を捧げてきたことを「日本人の心に深く刻まれている一年を通じた生活様式のリズム」とするなど、再び、ナショナリズムを垣間見せる。これら二つの文書より 1 年前の 2008 年

（平成20年）に発行された『里地里山保全再生計画策定の手引き』〔環境省2008〕では、地域の伝統文化にとって、里地里山が重要な役割を果たしてきたことは随所に述べられているが、それを「日本」に拡張する記述は見られない。

### 3.4 生物多様性国家戦略に見るナショナリズム

それ以前のものとしては、里山に直接、言及するものではないが、生物多様性国家戦略のなかに見られる、自然と共生する日本人像がある。生物多様性国家戦略は、1992年の生物多様性条約の成立を契機に作られたもので、数年ごとに見直されてきている。わが国の生物多様性保全のための政策を総合的に定めたもので、里山保全活用行動計画もこれに基づいて策定された。自然と共生する日本人という位置づけは、1995年の最初のものではなく、2002年の新・生物多様性国家戦略から現れる。2007年の第三次生物多様性国家戦略では、さらに踏み込んだ表現となり、2010年、2012年のものにもほぼそのまま踏襲されている。以下、その部分の抜粋である。

生物多様性国家戦略（1995年、以下「戦略」）〔環境庁1995〕

記述なし。

新・生物多様性国家戦略（2002年、以下「新・戦略」）〔環境省2002〕

私たち日本人は、長い歴史の中で、それぞれの地域に特有な生物多様性をあまり損なうことなく、その恵みを上手く活用しながら豊かな暮らしを営んできました。（第2部 生物多様性の保全及び持続可能な利用の理念と目標 第1章 5つの理念 4. 豊かな文化の根源 p34）。

第三次生物多様性国家戦略（2007年、以下「第三次・戦略」）〔環境省2008〕

島国である日本は、暖流と寒流がぶつかる豊かな海に恵まれ、四季の変化があり、湿潤な気候は豊富な降雨をもたらし、多くの動物が棲み、さまざまな植物が息づいています。このような日本は、古来より豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほのくに）と呼ばれ、すべてのものが豊かに成長する国土で日本人は四季とともに生きる文化をはぐくんできました。その一方で、地震や火山の噴火、土砂災害など常に自然災害と隣り合わせの生活を余儀なくされてきました。

このように、豊かですが荒々しい自然を前に、日本人は自然と対立するのではなく、自然に順応した形でさまざまな知識、技術、特徴ある芸術、豊かな感性や美意識をつちかい、多様な文化を形成してきました。その中で、自然と共生する伝統的な自然観がつくられてきたと考えられます。

例えば、日本では、長い時間をかけて農作物の生産などのために畑、水田、ため池、草地などを形成してきました。その際、自然に対する畏怖から、鎮守として祠を置いて八百万（やおよろず）の神を祀って、そのまわりを鎮守の森で覆いました。こうしたすべてを利用しつくさない考え方は日本人の自然との共生の姿を表しているともいえます。里地里山の利用においても、利用しすぎないための地域独自の決まりや仕組みがありましたし、現在でも山菜を採るときに来年以降のことを考えて一部を残す地元の人たちはたくさんいます。これから自然と共生する社会、ライフスタイルを築いていくためには、こうした限りある自然や資源を大切にしてきた伝統的な智慧や自然観を学ぶことが必要です。（第1部 生物多様性の保全及び持続可能な利用に向けた戦略 第1章第2節 いのちと暮らしを支える生物多様性 p14）。

生物多様性国家戦略 2010（以下、「2010戦略」）〔環境省2010b〕

第三次戦略と同一の文面。（第1部 生物多様性の保全及び持続可能な利用に向けた戦略 第1章 生物多様性の重要性と理念 第2節 いのちと暮らしを支える生物多様性 p13）。

生物多様性国家戦略 2012-2020（以下、「2012戦略」）〔環境省2012〕

第三次戦略・2010戦略と同一の文面。（第1部 生物多様性の保全及び持続可能な利用に向けた戦略 第1章 生物多様性の重要性と自然共生社会の実現に向けた理念 第2節 いのちと暮らしを支える生物多様性 p11-12）。



2002 年以降、ナショナリズムを包含した自然と共生する日本人像が盛り込まれてきたことがわかる。「里山」という語が用いられるようになったのも 2002 年の新・戦略以降である。里地里山保全を大きな柱の一つに据えたことが 1995 年の戦略からの改正点であることは、新・戦略の前文のなかでも明記されている。つまり、自然と共生する日本人像は、里山保全と軌を一にして行政文書中に登場したということになる。さらに、第三次戦略以降は、カミに言及するなど、およそ行政文書としては異質なまでにナショナル・イデオロギーが際だった記述になっている。

もう一つ、興味深いのは、各戦略の構成の変化である。ナショナリズム的記述がない 1995 年の戦略では、里地里山保全に関わる項目としては、「第 3 部 施策の展開 第 1 章 生息内保全」のなかに、「第 6 節 二次的自然環境の保全」が置かれている。これに対して、2002 年の新・戦略では、「第 2 部 生物多様性の保全及び持続可能な利用の理念と目標 第 1 章 5 つの理念」のなかの一つとして、「4. 豊かな文化の根源」という一節を設け、上に引用した記述を含む日本人の文化の源としての生物多様性について述べる。他方で、里地里山保全は「第 3 部 生物多様性の保全及び持続可能な利用の基本方針」のなかで主要なテーマの一つとして取り上げられている。第三次戦略では、上に引用した記述は「第 1 部生物多様性の保全及び持続可能な利用に向けた戦略 第 1 章 生物多様性の重要性と理念」の中の「第 2 節 いのちと暮らしを支える生物多様性」に含まれる。ここでも「里地里山」への言及はなく、あとに続く具体的な方針・施策の部分で、里地里山について触れる。ただし、新・戦略に比べ、より多くの記述項目がある。2010 戦略、2012 戦略でも、この構成は踏襲されている。この後段での里地里山に関する記述は、生態学的根拠を示しながら論理的に展開する。ナショナリズム色はない。こうしたある種の乖離は、前項で見た里山に関する文書での記述の仕方にも共通する。

整理すると、おおよそ 1995 年と 2002 年の間に、里地里山が自然と共生する日本人を表すアイコンとなったと思われる。それとともに、具体的な方針・施策は、生態学的知見を基盤にした政策論として語られるが、それとは異質なナショナリズム的語りが前段に置かれることで全体を包み込む構図が、関連文書中に共通して見られるようになった。

## 4. エコロジカル・ナショナリズム

### 4.1 『原田泰治の世界』と『里山物語』

前章で見たような自然と共生してきた農村の美しい風景が日本人の原風景だという里山についてのナショナリズム的記述は「ふるさと」へのノスタルジーの延長線上にあると考えてよいだろう。しかし、里山をめぐるナショナリズムには「ふるさと」へのノスタルジーとは異質な部分もある。エコロジカル・ナショナリズムたる所以である。その分岐をどこに認めることができるだろうか。ここでは、画家・原田泰治、写真家・今森光彦の比較からそれをたどる。

原田泰治は、日本の素朴な農村風景を描き、特に、1982 年から 2 年半にわたって朝日新聞日曜版に連載された「原田泰治の世界」は大きな反響を呼んだ。一方、今森光彦も、1990 年代から、滋賀県琵琶湖畔などを舞台に、伝統的な人と自然との関わりの美しい風景をとらえた写真を発表し、「里山」を人口に膾炙させるうえで重要な役割を果たしたといつてよい。両者とも、農村風景を、のどかでゆっくりとした時空間として表現してきたという意味で似通っているが、その視角には決定的な違いがある。原田のまなざしの中心が人であるのに対し、今森は生き物という点だ。

『原田泰治の世界』は、連載後、出版されている [原田 1988]。北海道から沖縄まで、津々浦々の農村・漁村の風景が、やさしい色彩で、明瞭ではあるが縦横の線が若干ゆがんだ形で描かれる。それによってごつごつとした温もりのある世界が表現されている。また、原田の絵の外形的な部分での最大の特徴として、人々の顔の眼・鼻・口が描かれない。つまり、のっぺらぼうである。これは、絵を見る人が心の中の人物を思い出してほしいという企図だという [JA 長野県 Web]。個々の表情を描かないことで、あらゆる人の表情を投影できる。個別性を包含できる。抽象的なものが想像の力で引力を持つのは、「ふるさと」のナショナリズムと同じである。表情をかき消すことで、さまざまな風景に生きる「日本人」となりえている。

原田が描いた風景は多岐にわたるが、その中でも自然の豊かさが強調されたものを見てみよう。「水パショウ」

という一枚がある〔原田 1988: 93〕。戸隠連山のすそ野、長野県上水内郡鬼無里村でのものだ。遠景に雪山、近景にはブナの木立。残雪のあいだに、水バショウが広がり、そのなかを木造の遊歩道が続き、父母と幼い子ども2人の家族が立ち止まって花を愛でている。この絵に添えられたエッセイ〔前掲書: 95〕では、ブナ林、小鳥のさえずり、クロサンショウウオの卵、水バショウの息をのむ美しさ、などが綴られ、最後に、開発や観光資源化を暗示するのか、発見されたところより水バショウが年々、小さくなっていると締めくくっている。失われつつある自然が主題である。しかし、それは、（エッセイ中では触れていないが）それを愛でる和やかな親子の姿に反転される。今森の作品の舞台である琵琶湖を描いたものも一枚ある〔前掲書: 144-145〕。「夕日の湖」と題され、湖畔に夕日が映え、湖岸で釣りをする子ども、漁から戻る小さな漁船などが描かれている。この絵に付されたエッセイでは、琵琶湖沿岸の豊かな水、井戸、水神様への供花、湖面に映る桜並木などに触れ、この絵の題材となった安土町の西の湖では、葦原や田舟を見ている。その上で「赤みをおびた夕暮れの太陽が、静かな湖面にキラキラと一本の帯を作り出し、子どもたちが思い思いの場所で魚釣りに興じていた。湖にはコイ、フナ、マス、小アユなど、我が国で生息する淡水魚のほとんどが見られ、漁を終えた舟が軽やかに音をたてて帰ってきた」と記す。さらに、琵琶湖の自然が破壊されているが、琵琶湖は大きいゆえに、まだまだ人々の生活文化に影響を与え続けている、と締めくくる〔前掲書: 146-147〕。大きな自然は、そこで調和して暮らす人々へと収斂する。そして、それは、前述のアイヴィーが示した、「消えゆく本来の日本」である。そのことは、「あとがき」でも強調されている。次第に失われつつある「日本のふるさと」を求めて、ということが、連載当初からの意図であったこと、取材の旅の中での地元の人々とのふれあいから「日本の心」を学んだこと、遠い日の少年時代が目の当たりに浮かんだこと、などである〔前掲書: 252-253〕。原田が描いた風景は、必ずしも「どこにでもあるもの」ばかりではないが、「日本人のふるさと」のイメージに抽象化され、ナショナリズムの容れ物たりうるものだったといえる。

一方、今森光彦の『里山物語』〔今森 1995〕、および、それに続く里地里山を題材とした作品群はどうだろうか。『里山物語』は、琵琶湖畔の滋賀県大津市仰木での棚田、雑木林、そこでの生き物などを題材にした写真集である。1995年に出版され、その後の「里山ブーム」のきっかけとなった。今森は、その後も、一貫して、里山における人と自然の共生をテーマに写真やエッセイなどで活動が続けている。それに依拠したNHKのドキュメンタリー番組も制作され話題を呼んだ。「里山」をタイトルに含むものだけでも、多くの写真集・フォトエッセイ集を出版しており、作品ごとの違いはあるが、叙情的な風景を大きく捉えたものと、生き物のアップの写真とが大きな比率を占める。特に、最初の『里山物語』は、それが顕著であり、人がほとんど写っていない。棚田の畦、水面のさざ波、雑木林の木立などの風景、草花や昆虫といった生き物のアップとも、光線の変化と絡めてその造形美を際立たせるような写真が多い。絵画と写真の違いはあるが、のどかな田園風景、豊かな自然を、原田よりシャープに、リアルに表す。中学・高校生向けに書かれた『里山を歩こう』〔今森 2002, 2008〕では、地元の人々の生業、生活、お祭りなどの伝統文化にも目を向けている。人が暮らす空間としての里山を多角的に紹介しようと努めている。しかし、その中でも、生き物のアップの写真が目を引く。この点は、歳時記的なフォトエッセイ集である『里山のことば』〔今森 2006〕、今森が監修したNHKのドキュメンタリー（BS放送で月曜日から土曜日、毎朝10分づつ、日本全国の里地里山を紹介する）を本にまとめた『NHK ニッポンの里山』〔NHK「ニッポンの里山」制作班編著 2014〕でも同様である。

写真に添えられたエッセイでは、もう少し、地元の人々の暮らしぶりや彼らとの触れあいについても書かれている。しかし、それは、生き物たちが暮らす空間を作り出すもう一方の当事者として、である。『里山物語』では、仰木に仕事場を作った時の話〔今森 1995: 28-29〕のほかは、オオスズメバチをとる時の話〔前掲書: 82-87〕のような地元の人々と生き物との関わり、自分自身が生き物と親しんできた思い出、などが綴られる。同書の最後では、「生命を育むすべての土壌を「里山」と呼び、私の愛する小さな命・昆虫たちと私たちとの接点をさぐっていききたい、そんな願いをこめてこの写真集をつくった」、タイトルに「里山」という言葉を用いたのは、「人里」「山里」でもない、より普遍的意味を持ち生態系を表現するのにふさわしかったからだ、と自身の意図を明示する〔前掲書: 153〕。後年の『里山のことば』『NHK ニッポンの里山』でも、人の営みが作り出した自然の穏やかな美しさ、季節感をフレームに、さまざまな生き物の姿を淡々と記述する。一定の叙情性はあるが、こうした具体的な記述のなかにナショナリズム的な要素はほとんどない。一方、まえがきの部分やコラム的な箇所ではナショナリズムが現れる。『里山を歩こう』では、『里山物語』の舞台となった仰木の里山の魅力を語りなが

ら、「ぼくはいつもここで仰木を見ているのではなく、日本の田舎、日本の里山を見ているつもりです」と言う[今森 2002: 6-7]。全国の里山を取材して歩いた『NHK ニッポンの里山』のなかでは、自然に対する人々の祈りの心があるから、日本の里山は微密で美しい、日本の里山の環境要因のなかで一番大事なものは田んぼだ、と語る[NHK「ニッポンの里山」編著 2014: 66-67]。

今森が原田と異なるのは、多くの具体的な生き物が生態学的に構成する世界として里山を捉えていることだ。昆虫をはじめとする生き物に着目したのは、子どもの頃から昆虫少年であった彼自身の関心によるものだ。しかし、生物図鑑のような写真集ではなく、叙情性やナショナリズムと貼り合わされている。NHK のドキュメンタリーとして映像化されることがこの貼り合わせを補強した。前出の『NHK ニッポンの里山』より前の、1998 年、2004 年にそれぞれ放映された『映像詩 里山』[NHK 2001]、同『II』[NHK 2004]では、木や昆虫、蛙などがメルヘンチックに擬人化される。ふるさとのナショナリズムと生態学とを精緻に融合させたのである<sup>7)</sup>。

#### 4.2 里地里山概念図

平成 20 年（2008 年）3 月に環境省が公表した『里地里山保全再生計画作成の手引き』[環境省 2008]という冊子がある。これは、平成 16 年（2004 年）より実施されてきた里地里山保全再生モデル事業を受け、保全再生活動を始めようとする自治体、地域団体、NPO などの参考になるように作成されたものである。里地里山の重要性、手入れの仕方、組織作りまでを含む、実践的なマニュアルとなっている。中でも目を惹かれるのがその表紙の絵である。一見、どこかわからないが日本の田舎の牧歌的風景のようである。絵の中央やや左下には、水田がある。丸く不均等に区切られた棚田のようだ。区画ごとに田植えの最中だったり、青く育った稲とともに魚が泳いでいたり、稲刈りをしていたりする。これは、農事暦の移ろいを表したものだだろう。中央やや右上には畑があり、さまざまな野菜などが植えられている。その上には、やや間隔を開けて 6 本の木が生えている。切り株から順に、ひこばえが育ち大木になっている。落葉広葉樹なのだろうか、その落葉を集めている人がいる。傍らには丸太が積み重ねられている。しいたけのほだ木、炭窯、建てかけの家屋、薪割りをする人、ドラム缶(?)でお風呂に入っている人、おくどさん、食卓、などが平らな土地に並ぶように描かれている。さらに左上から中央の奥には、山の中腹にシカ、イノシシ、ウサギがいる。タカなどの鳥、クワガタなどの虫も描かれている。中央やや右下には、木の柵のなかに馬やホルスタインが放牧され、飼料を食んでいる。水辺には、浴衣をきた母と男子がうちわを持ってたたずむ。釣りをする人もいる。草原には花が咲き、カエルやカマキリがいる。

類似のイラストは、ほかにも見られる。「日本の里山・里海評価」の報告書である『里山・里海－自然の恵みと人々の暮らし』[国際連合大学高等研究所／日本の里山里海評価委員会 2010]中にもある[口絵 1]。『里山の環境学』[武内・鷲谷・恒川編 2001]の表紙のイラストでは、水田、畑、農家、森林（針葉樹・広葉樹）に加え、遠方の松林や茶畑、果樹園も含まれている。

一見、牧歌的なタッチであると言う意味で、「ディスカバー・ジャパン」のポスターのように、「ふるさと」「日本の原風景」のイメージを喚起しようとする意図が読み取れる。しかし、従来の「ふるさと」イメージの表象とは決定的に異なる側面を併せ持つ。具体的な物事が過剰に詰め込まれているのである。実は、これは、里山の「イメージ」ではなく、「概念図」なのだ。つまり、発見された具体的な事象に基づく論理的に構築されたモデルがあり、それを説明するのである。アピールしたいポイント、つまり、人が生活の資源を里地里山から持続的に採取していたこと、そこで水田を中心に、四季折々、伝統的な生業や文化を育んできたこと、里の近くにはクワガタやオオタカなど、遠くにはイノシシ、シカ、などがいて、動物とも共生していたこと。こうした、少し前の時代にあった、そして、現在、保全されなければならない要素を具体的に示し、それらが連関した全体像として、この一枚の絵ができあがっている。

この筋書きがどう展開するのか。前出『手引き』中の後の箇所、2 章 2 項「里地里山を活用する」の冒頭に登場するもう一枚の絵はそれを明示する[環境省 2008: 5]。中央下部には水田が広がり、隣接する茅葺きの民家の一軒は、「里地里山学習センター」とキャプションがある。同様に、「落葉かき・たい肥づくり」「炭焼き」「竹林の手入れ」「二次林の手入れ」「自然観察」「水路の保全」「棚田の保全」「草原の保全」「水辺の保全」が、一枚の

7) 加藤 [2011] は、メディアで表象される里山イメージが実際の里山の履歴や実態と乖離して拡大し、それが、特に都市近郊での住民運動にも影響を与えていることを指摘し、批判する。

絵のなかに、書き込まれている。「草原の保全」の脇には小さな文字で「火入れ」とのキャプションもある。先の絵で示された里地里山のなかで保全されなければならない要素ごとに、明示的に保全活動が示され、さらに、自然観察や里地里山学習センターのような情報発信・教育的な利用も付加されている。

こうした、里山の「概念図」は、里山のナショナルリズムの性格を端的に示している。牧歌的、情緒的な「見かけ」と生態学的な論理とが表裏一体となっている。日本各地の多様な人と自然の関わりがあるが、それらは、「どこでもありそう」な抽象的なイメージに溶かし込まれるのではなく、要素の連関として論理的に分析され、一枚の絵に詰め込まれる。そうしてできあがったのが、「実際にはどこにもない（ことが明らかにわかる）」風景、概念図なのである。

#### 4.3 エコロジカル・ナショナルリズムとしての里山

叙情的なナショナルリズムと生態学的議論とを貼り合わせるというエコロジカル・ナショナルリズムは、今森などメディアでの表象や「概念図」に加え、前章で取り上げた政府が発行する里山に関連する文書・パンフレット類の記述にも見いだすことができる。一見、矛盾するようにも見える、この両者の接合は、どのような論理によって説明されるのだろうか。

“LOHAS”（lifestyles of health and sustainability の略）をコンセプトとする月刊誌『ソトコト』2008年6月号の付録である『チビコト』の特集「ゆたかな生物多様性と共に暮らす生き方 ニッポンは里山の国」は、商業出版の雑誌の一部だが、環境省自然環境局が制作協力をし、環境省の関連するウェブサイトでも無償で配布されているので、政府発行のパンフレットに準じると考えられる。この特集のタイトルこそが、エコロジカル・ナショナルリズムを一言で現している。表紙に続くプロローグの文章では、次のように記す。

（多種多様な生き物が暮らしている）そんな“いきものたちの”にぎわいが、生物多様性です。私たち人間もまた、その一員として暮らしています。多様な生き物たちの生命のつながり、その豊かな自然の恵みを受け、私たちは生きているのです。・・・（それが失われていること、自然とつながっているという意識を持つことの重要性を訴え）そのひとつのきっかけとして、『ソトコト』は、日本独特の自然観である「里山」に注目したいと思っています。「里」。それは、私たちの暮らす場所。「山」。それは、私たちの暮らしを支えてくれる自然。里と山とが調和の取れた「里山」的世界観に、人と自然とが調和して生きる理想的な姿がある [『チビコト』：2-3]。

詩的な効果を狙った文体で、生物多様性の一員として暮らすこと、つまり、自然と人とが協調して生きingことを理想的な姿とし、それを体現する「里山」は日本独特の自然観だ、と訴える。生態学は、人間を含む生態系全体を分析対象とすることで、日本人がかつて持っていた「里山」的世界の自然との調和、持続性を裏付けるのである。その上で、アイヴィのいうように、「消えゆく本来の日本」として、ノスタルジーをかき立て、幻影としての里山保全（もう実際には失われた人と自然のかかわり）を、オリジナルとは異なる、商品として消費できる形で作り上げるのである。

その消費のパッケージとして、人々を里山ボランティア、レクリエーション、環境教育などに誘うのが、里山関連の一連の政府の文書やパンフレット類である。前章でも示したように、これらの文書では、概ね、前段の部分で里山と日本人の伝統文化や精神性との深い関連を説くナショナルリズム的な記述があり、それに続く各論、具体論では、対照的に、科学的なデータなども示しながら淡々と何をどのようにすべきかが示されている。もう一度、それらの文書の記述の詳細を見てみよう。

2010年に策定された『里地里山保全活用行動計画』[環境省2010a]では、前文で、次のような順で論を展開する。

- 1) 縄文時代より日本列島では人々の営みの歴史と通じて、持続的に自然の恵みを享受する空間が形成・維持されてきた。
- 2) それが日本の生物的自然を豊かにしてきた。
- 3) そうした人の営みが作り出した里地里山に生活の場を見いだしてきた動植物がいる。例えば、ギフチョウやカ

タクリなどである。

4) それらの生き物は、古くから人々の身近にあり、歌・俳句・書画のモチーフになってきた。そうした里地里山の風景は、日本人が共有する原風景であり精神文化の基盤である。

5) それが、現在、危機にさらされている。

6) 高齢化・人口減少のため、農家や地域コミュニティだけでの保全活用が難しい。民間団体・企業などの新たな担い手による活動、行政・専門家との協働が必要である。

7) 二次的自然の重要性は、日本が COP 10 でも SATOYAMA イニシャチブとして提唱する。世界に率先しての国民的運動が求められる。

里地里山を日本人が歴史的に作り出し、生き物と共生する空間を持続的に維持してきたことは、日本人の原風景・精神文化の基盤であり。それは、国際的・科学的に評価される生物多様性なのだ、という論理構成である。つまり、アイヴィの示したような「消えゆく本来の日本」へのノスタルジーに加えて、国際的・科学的な評価をナショナリズム的な自意識をかき立てるもう一つの原動力にしているのである。

よって、それに続く、里地里山保全活用を具体的にどう進めてゆか、という部分で、叙情性を排除した淡々とした記述が続くのは、むしろ、当然とも言える。国際的・科学的に評価されるからである。前文の直後、「1. 問題の背景」では、冒頭で里地里山の定義と特性を再確認するが、「・・・動的・モザイク的な土地利用、循環型資源利用が行われてきた結果、二次的自然に特有の生物相・生態系が成立し、多様な生態系サービス享受しつつ自然と共生する豊かな生活文化が形成されてきました」（下線筆者）〔前掲書：1〕と、前文と同様のことを、テクニカルタームをふんだんに盛り込み、「科学的に」言い換えている。続いて、里地里山保全の目的と位置づけ、理念、方向性、基本方針、進め方、国による施策、が順に示される。そこでは、生物多様性、生態系サービスの発揮、地域活性化、そのための社会的役割分担と協働、といった用語によるシステムティックな叙述となっている。叙情的な表現、用語は一切ない。特に、「6. 保全活用の進め方」〔前掲書：15-24〕では、CO2 排出削減と関連づけたり、そのほか、生態系サービスを経済的に評価する手法の導入、資源循環のための新技術の開発・導入、里地里山のモニタリングの推進、など、科学的な裏付け・検証を軸にした方法が提示されている。「7. 国による保全施策」では、「(2) 生物多様性の把握や評価のための科学的基盤の整備」を含む〔前掲書：28-29〕。これは、一言で言うと、生態学的な調査研究である。このほか、社会的側面での取り組み（多様な主体の協働など）についても記述されているが、全体として、生物多様性の面で科学的に高い評価を得られることを最終的な目標としていることが読み取れる。

こうした、保全活用の方法・評価・目標設定での科学の重視は、実際に活動を組織・実施する自治体や団体向けの『里地里山保全再生計画作成の手引き』〔環境省 2008〕や、より広く一般市民向けに書かれた『里地里山保全活用行動計画』の概要版〔環境省 2010 c〕でも同様である。後者では、施策や取り組みの内容の一つとして「科学的理解に基づく生物多様性の推進」を明確に示している。こうした科学重視の結晶が、前述の 2007 年から 2010 年に実施された「日本の里山・里海評価」である。その報告書では、200 名を超える執筆者が、日本を地域ごとの 5 つのクラスターに分け、里地里山・里海の生態系サービスについて非常に精緻な評価を行っている〔国際連合大学高等研究所／日本の里山里海評価委員会 2010〕。特に、可能な限り、客観的な数値データに依拠した議論の展開が特徴である。SATOYAMA イニシャチブへの科学的基盤を提供することもその目的の一つであった〔前掲書：i〕。

このように、里山をめぐるエコロジカル・ナショナリズムは、一方で、科学的評価・検証、国際的な生物多様性保全への関心の高まり、を、現代的な意味でのナショナリズムの合理的根拠とし、他方で、生き物の擬人化、農村の人々や景観の戯画化、といった、「ふるさと」のノスタルジーを喚起するという二つのメカニズムが接合することで成立したのである。

## 5. まとめ：エコロジカル・ナショナリズムの権力と抵抗の契機

こうした、里山をめぐるエコロジカル・ナショナリズムの有する独特の科学とノスタルジーの接合が、現実の保全活動の展開とどのように関係しているのか、その詳細を検討することはここではしない。ここでは、科学的

知識に裏打ちされたナショナリズムが有するであろういくつかの問題について、検討課題を提示しておきたい。

まず、科学的知識が有する権力性の問題である。松村〔2007〕がすでに指摘しているように、生態学の知識（を有する専門家）は、ボランティアによる里山保全活動の実践を一定の方向に導こうとする政治的な力を持つ。非専門家ではない参加者たちは、実は、里山保全活動のなかに多様な意義を見いだしている。にも関わらず、生態系管理の観点から一定の方向・枠組みに押し込めてしまうと参加者の意欲・力を削いでしまう。

科学は別の作用も持っている。「非政治」(Anti-politics)の作用である。開発や環境保全のプロジェクトにおいて、実施する側（行政や NGO など）が現地の社会に何らかの介入を行う際に、しばしば、プロジェクトの内容・方法などが客観的・科学的根拠に基づき自動的に導き出されるものであることを強調する。そうすることで、実施機関と現地の人々との間、あるいは、複数の実施機関の間にあるイデオロギーや利害の対立を隠蔽する。つまり、政治的でないように装う。これが anti-politics である〔Ferguson 1994; Büscher 2010〕。科学的知識が産出される過程において人間による一定の方向付けや解釈が介在しているにも関わらず、科学が一切の政治性を持たず客観・中立に存在しているとみなされる〔Latour 2004; Forthys 2003〕。よって、科学は anti-politics の非常に効果的な道具となりうるのである。

里山のエコロジカル・ナショナリズムにも、そうした anti-politics の作用がある。生態学を中心にした科学的なデータをできる限り用いて客観的にも妥当性のある政策を実施しようという政府の姿勢は、自然保護の文脈では望ましいのかも知れない。しかし、人々が生業を営むなかで作られてきた環境を、総体として、国民的運動によって守るということは、地元を中心として広がる社会、文化、あるいは人々の暮らしそのものをある型にはめ固定するということである。科学的データによって政策を基礎づけることは、専門家以外を議論から排除することを意味する。地元暮らしの人々も、ボランティアとして里山保全活動に参加する人々も、そうした科学の持つ権力性と接合された「ふるさと」のノスタルジーに対して異議申し立てができなくなる。二重に疎外されるのである。

もちろん、「ふるさと」のノスタルジーが観光資源として作り替えられた状況でも、地元の人々は常に従属的なだけではない。川森〔2001〕は、遠野の語り部たちを例に次のように論じる。観光地化された「とおの昔話村」で観光客相手に昔話を語る語り部たちは、現実の生活のなかで子どもたちに昔話を語ることはない。方言の語彙のなかには、忘れてしまったものも少なくない。そのようななか、意識的な努力によって方言による昔話の語りを練り上げて、観光という場で自分の語りが占める位置を積極的に獲得しにゆく語り部もいる。そこに、外部から観光という仕組みによって与えられた「ふるさと」イメージを越える、語り部自身の自己表現を見いだすことができる。そうした自己表現は、外側の支配的な言説への抵抗の契機となり得る。

一方、山本〔2013〕によれば、今森光彦の写真集の舞台になった滋賀県大津市仰木の人々が、都会からの観光客が多数訪れるようになり、彼らの賛辞をうれしいと感じながらも、外からのまなざしを浴び続けることへの面倒くささや、一面的なイメージに絡め取られることへの違和感を感じているという。もともと、「里山」も「棚田」もこの土地の言葉ではなかった。また、現実には、高齢化・担い手不足により耕作放棄が増えており、むらの内部では、圃場整備をめぐるさまざまな見解がある。そのため、棚田の保全修復と同時に別の場所では圃場整備が進められるなど、複雑な動きが見られた。このように、外側からのイメージと現実とは相当なギャップがあることを指摘する。

菊池〔2007〕は、能登半島輪島市の「白米の千枚田」の保存をめぐる、文化的景観を称揚するグローバルな動きのなかで棚田がどう位置づけられ、地域社会がどのような影響を受けるのかを論じる。国際的なイベントやメディアへの露出により、棚田の景観が整えられ、観光客が押し寄せるようになり、地元住民も物販などで収入を得ることができるようになった。ある地元の人々は、千枚田は景観のための田と割り切って耕作され、米を収穫するための田は別にあるとさえ言う。しかし、それでも、棚田の範囲・境界が、行政・地元・専門家を交えて策定される保存管理計画の指定するものと地元住民の認識と一致せず、地元住民の間でもずれがあり、それが規制や補助金の支給をめぐる疑問として問題となっているという。より示唆的なのは、土産売りのバアバの「(昔は)棚田を眺める余裕なんか全然なかったよ」という語りである。菊池はそこに、村の人にとっての景色は、個々人の身体的な記憶が刻まれた、時間の堆積とともにあるものだ、として、「美しさ」「自然」「伝統」といった大文字の概念に収まりきれないものとの落差を強調する。

そういう意味で、富田 [2014] による佐賀県のアザメの瀬の自然再生事業の事例分析は、権力への抵抗を当事者自身の積み上げにより実現したという点で興味深い。もともと、具体的な生態学的目標があいまいな事業だったため、現地住民は、何を目標とするのかから話し合わなければならなかった。そこで、人々は、子どもが川や水田に入り、飼って、獲って、口に入れるということを肌で感じるができる環境を再生させることを目標に置いた。事業の枠組みとして、大まかに生物多様性保全のための自然再生という目的はあったが、それは、お題目としてのみ使われた。上から権力的に押しつけられる論理を、自ら巧妙に読み替えることで抵抗することができたのである。

エコロジカル・ナショナリズムはすべて悪というわけではない。生物多様性保全のために立場の違いを越えて人々が協力し合う原動力ともなりうる。ただ、その一方で、地元の人々を中心に、里山という場にさまざまな立場から関わる人たちが、自らの生活のなかで里山をどう使うのかを主体的に考え実践することができるようにすることも重要である。どう使おうがその結果、生まれる生態系が現代の「里山」なのではないだろうか。これまで、歴史のなかで様々な使われ、その姿を変え続けてきた里山は、これからも変わってゆく。生物多様性の重要性をはじめ里山保全をめぐる既成観念を一端、脇に置いて、その可能性を考えてみるべきなのかもしれない。

生物多様性保全に主観的価値が混ざり合い、専門家の知識として現場に下りてくる。そうした知識の権力性に対し、アザメの瀬の例のように、人々は「同床異夢」的な戦略によって抵抗することができる。しかし、現実には、そうではなく、専門的知識の権力性に絡め取られていることが少なくないだろう。エコロジカル・ナショナリズムが人々によって内面化される契機もありえよう。そもそも、そうしたナショナリズムがいかなる政治的文脈のなかで生み出され、どのような過程で政策に盛り込まれるに至ったのか。そうしたポリティクスの全体を明らかにし、そのなかに、地域の人々の受容・内面化、抵抗、生活の中での実践を位置づけてみるというような実証研究を行ってゆくことが今後の課題となろう。

#### 参 照 文 献

- Büscher, Bram. 2010. Anti-Politics as Political Strategy: Neoliberalism and Transfrontier Conservation in Southern Africa. *Development and Change* 41-1: 29-51.
- Ferguson, James. 1994. *Anti-Politics Machine: "Development," Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Forthys, Tim. 2003. *Critical Political Ecology: The Politics of Environmental Science*. Oxford: Routledge.
- Ivy, Marilyn. 1995. *Discourse of the Vanishing: Modernity Phantasm Japan*. Chicago: The University of Chicago Press.
- JA 長野県 Web. n. d. 「原田泰治作品と味わう「ふるさとの味」」(<http://www.ijan.or.jp/oishii/area/south/post-2176.php>)
- NHK. 2001. 『映像詩 里山：人と自然がともに生きる』(DVD ソフト) NHK ソフトウェア.
- NHK. 2004. 『映像詩 里山Ⅱ：命をめぐる水辺』(DVD ソフト) NHK ソフトウェア.
- NHK「ニッポンの里山」制作班編著. 2014. 『NHK ニッポンの里山：ふるさとの絶景 100』NHK 出版.
- Latour, Bruno. 2004. *Politics of Nature: How to Bring the Sciences into Democracy*. Cambridge: Harvard University Press.
- Robertson, Jennifer. 1988. *Furusato Japan: The Culture and Politics of Nostalgia*. *Politics, Culture and Society* Vol.1: 494-518.
- Robertson, Jennifer. 1991. Native and Newcomer: Making and Remaking a Japanese City. Berkeley: University of California Press.
- Robertson, Jennifer. 1995. Hegemonic Nostalgia, Tourism, and Nation-Making in Japan. *Senri Ethnological Studies* 38: 89-103.
- Robertson, Jennifer. 1998. It Takes a Village: Internationalization and Nostalgia in Postwar Japan. In *Mirror of Modernity: Invented Traditions of Modern Japan*, edited by Stephan Vlastos: 111-131. Berkeley: University of California Press.
- 荒山正彦, 2003, 「風景のローカリズム」『郷土：表象と実践』「郷土」研究会編：90-107.
- 有岡利幸, 2004, 『里山Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局.
- 石井実・植田邦彦・重松敏則, 1993, 『里山の自然をまもる』築地書館.
- 石井清輝, 2007, 「消費される「故郷」の誕生－戦後日本のナショナリズムとノスタルジア」『哲学』(三田哲学会) 117: 125-156.
- 今森光彦, 1995, 『里山物語』新潮社.
- 今森光彦, 2002, 『里山を歩こう』岩波書店.
- 今森光彦, 2006, 『里山のことば』世界文化社.
- 今森光彦, 2008, 『里山を歩こう Part 2：わき水の里から琵琶湖へ』岩波書店.
- 岩本通弥, 2007, 「「ふるさと文化復興事業」政策立案過程とその後」『ふるさと資源化と民俗学』岩本通弥編：37-61.
- 牛尾洋也・鈴木龍也編著, 2012, 『里山のガバナンス：里山学のひろく地平』晃洋書房.
- 加藤晃正, 2011, 「都市空間における里山の再創造－稲城市「南山東部土地区画整理」の事例から考える」『応用社会学研究』

53: 109-121.

- 岡秀郎, 2016, 「特集 保全協会設立 40 周年 自然保護の奇跡と地平 (2) 里山保全運動 黎明から混迷へ (座談会)」『都市と自然』488: 4-11.
- 川森博司, 2001, 「現代日本における観光と地域社会」『民族学研究』66-1: 68-86.
- 環境省, 2002, 『新・生物多様性国家戦略』([http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankyo/kettei/020327tayosei\\_f.html](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankyo/kettei/020327tayosei_f.html))
- 環境省, 2008, 『第三次生物多様性国家戦略』([http://www.biodic.go.jp/cbd/pdf/nbsap\\_3.pdf](http://www.biodic.go.jp/cbd/pdf/nbsap_3.pdf))
- 環境省, 2008, 『里地里山保全再生計画作成の手引き』環境省.
- 環境省, 2009, 『SATOYAMA イニシャティブ: 自然と共生する持続可能な農山村社会のためのビジョン』
- 環境省, 2010 a, 『里地里山保全活用行動計画』環境省.
- 環境省, 2010 b, 『生物多様性国家戦略 2010』([http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives4/files/01\\_mainbody.pdf](http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives4/files/01_mainbody.pdf))
- 環境省, 2010 c, 『自然と共に生きるにぎわいの里づくり: 里地里山保全活用行動計画』環境省.
- 環境省, 2012, 『生物多様性国家戦略 2012-2020』([http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/files/2012-2020/01\\_honbun.pdf](http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives/files/2012-2020/01_honbun.pdf))
- 環境庁, 1995, 『生物多様性国家戦略』([http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives1/files/nbsap\\_1995.pdf](http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/initiatives1/files/nbsap_1995.pdf))
- 菊池 暁, 2007, 「コスメティック・アグリカルチャリズムー石川県輪島市「白米の千枚田」の場合」『ふるさと資源化と民俗学』岩本通弥編: 86-104.
- 国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会編, 2010, 『里山・里海: 自然の恵みと人々の暮らし』朝倉書店.
- 佐久間大輔, 2014, 「里山は「自給」的システムであったか」『2010 年代のための里山シンポジウムーどこまで理解できたか, どう向き合っていくかー』講演記録集.
- 佐久間大輔・伊東宏樹, 2011, 「里山の商品生産と自然」『里と林の環境史 (シリーズ 日本列島の三万五千年ー人と自然の環境史)』湯本貴和編: 101-128. 文一総合出版.
- 佐々木雅幸, 1990, 「転換期における地域開発と国家補助金の新動向: テクノポリス・リゾート開発, そして「ふるさと創生」事業」『金沢大学経済学部論集』10(2): 165-214.
- 重松敏則, 1999, 『新しい里山再生法: 市民参加型の提案』全国林業改良普及協会.
- 『チビコト』(月刊『ソトコト』2008 年 6 月号付録).
- 武内和彦, 2013, 『世界農業遺産ー注目される日本の里地里山』祥伝社.
- 武内和彦・鷺谷いずみ・恒川篤史編, 2001, 『里山の環境学』東京大学出版会.
- 田端英雄編著, 1997, 『里山の自然』保育社.
- 土屋健治, 1991, 『カルティニの風景』めこん.
- 坪井洋文, 1986, 「故郷の精神誌」『日本民俗文化体系第 12 巻 現代と民俗ー伝統の変容と再生』谷川健一編: 267-308. 小学館.
- 富田涼都, 2014, 『自然再生の環境倫理: 復元から再生へ』昭和堂.
- 中川重年, 2004, 『森づくりテキストブック: 市民による里山林・人工林管理マニュアル』山と溪谷社.
- 永野健二, 1997, 「行革は「懸念」から入れ: 大改革ほど基礎から勉強を」(編集長インタビュー: 竹下登氏 [元首相]). 『NIKKEI BUSINESS』1997 年 2 月 24 日号: 40-43.
- 原田泰治, 1988, 『ふるさとの詩: 原田泰治の世界』朝日新聞出版.
- 古川 彰, 2004, 『村の生活環境史』世界思想社.
- 松村正治, 2007, 「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方ー身近な環境調査による市民デザインの可能性」『環境社会学研究』13 号: 143-157.
- 松村正治・香坂玲, 2010, 「生物多様性・里山の研究動向から考える人間ー自然系の環境社会学」『環境社会学研究』16: 179-196.
- 丸山徳次・宮浦富保編, 2007, 『里山学のすすめ: <文化としての自然> 再生へむけて』昭和堂.
- 丸山徳次・宮浦富保編, 2009, 『里山学のまなざし <森のある大学> から』昭和堂.
- 宮浦富保, 2007, 「森と人の関わりー滋賀の里山」『里山学のすすめ: <文化としての自然> 再生へむけて』丸山徳次・宮浦富保編: 51-63. 昭和堂.
- 村澤真保呂・牛尾洋也・宮浦富保編, 2015, 『里山学講義』晃洋書房.
- 藻谷浩介, 2013, 『里山資本主義ー日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店.
- 守山 弘, 1988, 『自然を守るとはどういうことか』農文協.
- 森岡正博, 1994, 『生命観を問いなおすーエコロジーから脳死まで』筑摩書房.
- 養父志乃夫, 2009, 『里地里山文化論 (上): 循環型社会の基層と形成』農文協.
- 山本早苗, 2013, 『棚田の水環境史: 琵琶湖辺にみる開発・災害・保全の 1200 年』昭和堂.
- 横田岳人, 2009, 「瀬田丘陵の植生と里山の植物多様性」『里山学のまなざし <森のある大学> から』丸山徳次・宮浦富保編: 259-268. 昭和堂.



**新聞記事**

- 日本経済新聞 1987 年 10 月 10 日「自民総裁候補の経済対策（下）竹下氏－「文化経済国家」を創造（経済教室）」  
日本経済新聞 1987 年 11 月 27 日「竹下首相，所信表明演説の全文－日米軸に世界に貢献」

